世界を変えよう基金報告書

第七回つくばリサイタルシリーズ―いま、一番聴きたい金管五重奏団

2019 年 2 月 3 日

文責：山田健悟(比較文化学類 2 年)

１．つくばリサイタルシリーズ実行委員会について

つくばリサイタルシリーズ実行委員会は、つくばでプロの演奏家によるコンサートを運営する学生団体である。つくばの学生および広範な市民が経済的に大きな負担を伴わずに本物のクラシック音楽を鑑賞できる機会を提供することを目的としており、2018 年度で第七回目の活動となる。通常、プロの演奏を聴くには高額なチケット代を払う必要があることもあり、クラシックに対して敷居の高さを感じる人間は多い。その意識を変えるため、つくば市民にとって身近な土地で、手軽な値段によりかつ「本物」のクラシックを広めるという本シリーズの思想は例年のアンケート結果からも高い評価を受けている。

企業協賛やクラウドファンディングといった手段により活動資金を確保し、可能な限り低価格かつ高品質な演奏会を実現している。

２．今年度事業の概要

事業名：第七回つくばリサイタルシリーズ　―いま、一番聴きたい金管五重奏団
実施日：2019 年 1 月 14 日(月)　 14：00 開演（13：30 開場）
会場：つくばカピオホール
価格：一般 1000 円、学生無料
出演：　辻本 憲一（トランペット）
　　尹 千浩（トランペット）
　　日橋 辰朗（ホルン）
　　桒田 晃（トロンボーン）
　　次田 心平（チューバ）

プログラム：

・ケヴィン・マッキー　エスケイプ　Kevin McKee: Escape
・ウジェーヌ・ボザ　ソナチネ　Eugène Bozza: Sonatine
・ジョン・チータム　スケルツォ　John Cheetham :Scherzo
・江藤光紀：空想の街角（初演）　Mitsunori Eto :On a fictive street corner (Premiere)
・織田英子: 金管五重奏曲 Eiko Orita: Brass Quintet
・ポール・ナグル　ジャイヴ・フォー・ファイヴ　Paul Nagle: Jive for Five

当日の様子：

↓開場時の受付の様子

↓ホルン演奏

↓尹氏による司会進行

↓演奏会終了時

↓終演後、関係者での記念撮影

３．活動の達成度

・金管五重奏というテーマと広報活動について

今年度で第七回となる本活動は、読売交響楽団のトップ奏者による金管五重奏のコンサートを企画した。つくばリサイタルシリーズの顧客はその目的上、クラシックの愛好家とクラシックに詳しくない層の双方を対象としているが、今回のテーマに対する反応は当初、やや淡泊なものであった。クラシックを詳しくない層にとって金管五重奏は一般的に知れ渡った代表曲も少なく、前年度の弦楽四重奏と比較してもさらに馴染みは薄かったと思われる。またクラシックが好きな層に関しても、多くの時代や編成を内包するクラシックの中で金管五重奏をあまり聴かないという人間もおり、クラシック愛好家というひとくくりの分類に対する認識の甘さが明るみに出た結果であった。しかしながら一方で吹奏楽を好む層からは出演する演奏家のレベルの高さもあり、「凄い会がつくばで開催される」という評判も上がった。実行委員会ではこれに着目し、筑波大学の吹奏楽関係者などから推薦コメントを集め、広報に活用した。今回の広報活動の分析において、実行委員会単独での影響力はまだまだ大きなものではなく、他のメディアやインフルエンサーの発信を活用することの重要さが浮き彫りになった。広報ブログのアクセス数を分析しても、他所で本企画が取り上げられることで多くの人がサイトを訪れるようになったことが分かっている。

・アンケートからの分析

今回も、例年通り来場者に対してアンケートを実施した。

来場者数は約 270 名であり、過去最高を記録した前年度の約 250 名を上回る結果であった。内訳としては、大学生(院含む)が 53.6%、社会人が 40.8%であり、大学生が過半数を占めたほか、少数ながらも中高生の参加も見られた。

演奏会を知ったきっかけについては、「知人から(33.5%)」「ビラ(15.5%)」「ポスター(12.4%)」「大学ＨＰ(12.4%)」が主なものであった。演奏会の関係者による来客が多いことは演奏会全般として妥当なものであるが、大学ＨＰの効果が大きいことは学生を主要な対象とする本企画ならではのものであろう。

前年度は平日の夜の開催であったが、今回は祝日の午後 14 時とした。これについては 91.9%と大多数が「この時間帯が良い」と答えたが、19 時ごろの開催を希望する声もみられた。ただし成人の日ということで新成人にとっては厳しい日程であったと思われる。学生を主要な観客として求める本企画においては考慮する必要があったかもしれない。

・運営体制について

第七回として回数を重ね、定例化した本企画であったが、その運営体制には課題が残った。

発足当初の第一回は、外部のホールではなく筑波大学の大学会館を利用するなど、より小規模な活動であった。また前年度から筑波大学比較文化学類の援助が得られなくなるなどにより、クラウドファンディングや世界を変えよう基金といった新たな場所での予算確保

が求められるようになったという実情があり、回を重ねるごとにその運営方法も変化してきた。それに対して実行委員会も対応しきれていない部分は否定できず、来年度以降も活動を継続していくためには内部組織の改革が求められる。

学生団体である都合上、同じ人間が何年も運営に携わり続けることは難しい。しかし実行委員会の継続により積み上げられた経験値が大きな資産となることは間違いない。これまでの運営データを引き継ぎながら、できることを探っていきたい。やや不定期な集会を定例化し、広報や運営についての共有・勉強会や、自分たちの届ける音楽・演奏家についての理解をより深めることで効率的な運営と、より主体的な活動を実現できるよう努めていくことになるであろう。

４．総評

今回も演奏会としては満足度の高いものとすることが出来たと思われる。観客数やアンケート結果も上々であり、つくば地域の文化振興という目的は達成したと言えるだろう。しかし実行委員会の体制は着実に変革を求められている。どうするべきかを問いなおし、再び良い演奏会を実施できるよう、これからの活動に励みたい。